



火星と金星の成れの果て

目次

< 這いずるもの > 魂神 4p ~ 21p

< ダイモーン > 黒司 22p ~ 33p

< タタリ > 六輪廻 34p ~ 42p



這いずるもの

廃線となった地下鉄は、長い間放置されていた。立ち入り禁止とはなっているが、内部に入るとは容易だが、誰も進んで近付こうとは思わない。だが、路上生活者にとって雨風をしのげる格好の場所になりそうなものだが、人の気配は全く無い。

そんな場所に妖魔が大量に巣食っているとの情報を得たセーラー戦士達は、地下鉄の無数に存在する入り口から二手に別れて侵入したのだが――しばらく進んだ直後に空気が変わったことを歴戦のセーラー戦士であるセーラーヴィーナスが感じた。同じように、セーラーマーズも邪悪な妖気が奔めいていることを天性の霊感で感じ取った。

セーラーマーズは手に持つ護符を掲げた。

「来たみたいね」

セーラーヴィーナスもそれに頷いた。

「ええ、情報は間違ってたなかったみたいだけど……これは酷いわ」

少なくとも一〇体以上。細かな反応も含めるとその数は一〇〇を超えるに達しない。薄暗い中、未だ相手の姿は見えないが、妖魔であることはもはや疑いようも無い。

「来たわッ」

言うと同時にセーラーマーズは前方に向かって護符を投げつける。護符は相手に迫り着く半ばで炎を発生し、薄暗い地下通路を照らし出した。

「うっ……」

ヴィーナスが思わず口元に手を当てた。それは巨大なナメクジ

の集団と、ナメクジのような外見となった人間の姿だった。「最近、何人も行方不明になってる原因は、こいつらのせいだったのね……ッ」

ナメクジ型の人間は、見ればボロボロになった服を着ているものもある。恐らくはナメクジ妖魔によって妖魔化させられたのだろう。

「妖魔を倒すだけじゃ駄目、彼女達も救わないと……」

「解ってるわ!」

言うが早い、マーズとヴィーナスは同時に動いた。

「クレッセント・ビーム!」

「ファイヤー・ソウル!!!」

光の槍と、火球が前方のナメクジ達を一気に蹴散らす。

「こいつら、そんな強く無い……」

あまりに呆気ない結果に、思わずヴィーナスの気が緩む。

「油断しないで、未だ妖気は消えていないわ」

そう、倒れ伏したナメクジ人間、消し飛んだナメクジ達の後方には、さらに夥しい数の

ナメクジが奔めいている。

「うう……ナメクジってどうも苦手なのよね」

「好き嫌い言うてる場合じゃないわ」

普通の女の子であれば、大量に奔めくナメクジを見ただけで卒倒してしまうだろうが、セーラー戦士である彼女たちにとっては、

そんなことは許されない。

「早く帰ってシャワーでも浴びなきゃね」

生臭い匂いは、二人のセーラー戦士の長い髪にこびり付いてしまっている。そこに、マーズの炎によって焼かれたナメクジの焦げ臭い匂いが絡みつき、耐え難い臭気を放っていた。





「きっと、他のみんなも同じような状況よね……」

護符を構えるマーズの懸念は最もであった。そして、数で攻めてくる妖魔に対して、自分たちのエナジーがいつまで保つのか。やれるだけの事はやるつもりだが、万が一の場合は一度撤退することも考える必要がある。

マーズの考えていることは、ヴィーナスにも伝わった。

「そうね、でも何とかナメクジにされちゃった人達だけでも……」

頷きながらヴィーナスは必殺技を連続で撃ち放つ。未だ未だ疲れは感じない。

「そうね、いつまでもあんな姿じゃやりきれないわ」

自分と同年代と思われる人間の成れの果てを見ると、やりきれない。怒りと使命感からセーラー戦士としての力は奥底から幾らでも湧いてきそうだった。

「これなら、大丈夫かもしれないわ」

ナメクジを薙ぎ払いながら進んでいく二人のセーラー戦士。だが、次の瞬間に歯車がひとつだけ狂ってしまった。それが全体の瓦解につながる、ほんの些細な失敗だった。

「うっ、きゃっ!!!」

はつきりと見えない足元は、ナメクジの粘液で全面が覆い尽くされていたのだ。その強力な粘着力は、まるでゴキブリやネズミを捕獲するトリモチのように強力で、一步そこへ足を踏み出したヴィーナスの靴は、床へと張り付いてしまった。

バランスを崩したヴィーナスは、辛うじて踏ん張ろうとするも、かなわずに尻もちを付いてしまう。そう、ナメクジの粘液が大量に敷かれた地面の上へと。

「ヴィーナス!」

マーズにとって、ヴィーナスがバランスを崩した理由が解らずに、助け起こそうと駆け寄ったが、それは失策であった。

「マーズ着ちや駄目!」

ヴィーナスの警告も遅く、マーズの靴も床の粘着に張り付き、駆け寄ろうとした姿勢で前のめりに転んでしまった。

「くっ……」

ベチャリという感触が手と、膝に響く。懸命に引き剥がそうとしても、粘液が伸びるだけで決して取れることはない。

「ヴィーナス、大丈夫?」

「大丈夫、けども……うっ」

転んだ事は大了なことではない。身動きを封じられてしまったことが最大のミスであった。二人の、無力となったセーラー戦士は、眼前のナメクジの群れに為す術もなくなってしまった。

「ひっ……」

抵抗できるからこそ、気色の悪いナメクジ相手でも何とか気丈に振る舞えたが、この状況では最早恐怖しか感じない。

「こ、の……ッ」

「駄目、動けないッ」

もがけば藻掻くほど粘液は混ざり合って粘着力を増していくように感じる。両手はグローブを脱ぎ捨てれば何とか動かせると思ったが、グローブから浸透する粘液はそのまま素肌に張り付き、グローブと手を接着してしまっていた。

「来ないでよ、気持ち悪いッ」

叫べども、ナメクジには言葉が通じようもなく、止まる素振りすらなかった。

「早く、早く何とかしないと……このままじゃ」

マーズにも焦りが生まれていた。そして、自分が怯えた表情を



している事にも気付かず、懸命に身体を揺り動かすだけだった。
「お願いだから、それ以上来ないで……」
ヴィーナスに至っては、足を広げた状態でナメクジに向かい合っているのだ。足は閉じて、その無防備な股間は突き出されたままだ。

一気に立場が逆転した状況。妖魔を退治する側が、敗北へと突き進む瞬間だった。

「いや、いやっ！」

ナメクジに自分の身体を触られる恐怖。ただのナメクジでさえ嫌悪感があるというのに、この巨大なナメクジは醜悪な外見の妖魔なのだ。妖魔にセーラー戦士が敗北する、そんな覚悟は持っていただろうが、このような形で訪れるとは、この二人のセーラー戦士にとっては想像の範囲外だったろう。

「あきらめないでヴィーナス！」

「解ってるわ！ 解ってるけど……ッ」

逃げ出したい、この状況を何とかしたい気持ちの強さはマーズもヴィーナスも等しく持っている。しかし、一メートルを切った範囲にまでナメクジが群がり、こちらへ向かって来て、いるのだ。足の裏、両手、お尻、全てが地面に固定され、唯一自由なのは上半身のみ。肩を揺さぶり、両手をなんとか地面から引き剥がそうと掻きまくるヴィーナスに、ついにナメクジが辿り着いた。

「ひっ……ッ」

靴の上を、脚を這いずりまわるナメクジ達。

「いやああああああ！！」

筆舌に尽くしがたい嫌悪感がヴィーナスを襲った。適度な温度と、粘液の不快感。それが自らの身体の伸縮させてヴィーナスをまるで山に見立てたように登る。

「こ、来ないで！ やめてっ！！」

恥も外聞も無く叫んだ。無力な自分がナメクジに蹂躪される。それを見ていることしか出来ない絶望感。戦士としての矜持など、微塵も残っていないかった。それだけ、この醜悪なナメクジのインパクトが凄まじいのだろう。

「いや、こんなの嫌よ！ 気持ち悪いッ」

小さなナメクジが脚を、手を登り、人間大の巨大なナメクジがヴィーナスの眼前に迫り着く。そして、そのナメクジは自らの起こした身体をヴィーナスに向けて一気に倒した。ヴィーナスはそれを受け止める形となってしまう。

「きやあああああああああああああッ」

全身でそのナメクジの身体を受け止めたヴィーナスに粘液がまとわりつく。最早、粘液で濡れていないところなど無かった。ヌチャヌチャとナメクジは身体を震わせ、まるでマーキングで

「うっ、くう……ひっ、い、いやああああ！！」

粘液によるマッサージにも似た愛撫。だが、ヴィーナスの苦難はそれだけではなかった。

「ぐむう！！ んぐっ」

叫んでいた口に、ナメクジはすかさずその頭部の触手を差し込んだのだ。

「んんんんんんんッ！！」

口内で粘液で満たされ、ナメクジの触手で隅々までそれが擦り付けられる。舌も、歯も、喉も。自らの身体の内側までもナメクジによって蹂躪され、ヴィーナスの思考はパニックに陥っていた。

（もう嫌ッ！！ 誰か、誰か助けて！！ お願いだから誰か助け



て!!!)

自らが助かる方策も考える事ができず、ひたすらこの地獄から抜け出すことを願うしか出来ない。そのおぞましい粘液に混じってヴィーナスの涙が、唾液が溢れ落ちていく。

「ヴィーナス! 負けちゃ駄目よ!」

たまたまにマーズは叫んだ。だが、彼女の絶望はマーズにとって不可解なものではない。自分のほんの目の前で、親友の、仲間

の姿がナメクジに埋もれていくのだから。

口をふさがれたのか、ヴィーナスのくぐもった呻き声が聞こえ、

ナメクジに身体を蹂躪される粘液の水音が響く。

(未だよ、未だ諦めるには早いわ……)

だが、ヴィーナスからわずかに離れているというだけで、マーズにとっても危機的状況であることには変わりはない。そう、ナメクジは着実にマーズに対しても向かってきているのだ。

「うっ……」

まずはマーズの地面についた両手から、ナメクジが登り始める。

「こ、の……離れなさいッ!」

ヴィーナスよりも、多少ナメクジに対して精神的な耐性がある彼女だったが、それでも不快であることには変わりはない。

「ちよつと……こ、来ないでよ……」

そう、本命が近づいている。

「それ以上近付いたら、しよ、承知しないわよッ」

それはマーズの背後からゆっくりと近付いて来ていた。最早、四つん這いのような形となったマーズの足先にまで迫り着いていた。

「ひっ……」

自由に動く頭を動かし、自らの後方を見やる。そこにはナメク

ジ人間が虚ろな瞳でマーズを眺め、額から生えた目の触手をしきりと動かしていた。

「い、いやっ!!! やめて! 来ないで!」

まさに、今しがたヴィーナスが叫んでいたことと同じような叫び声を上げてマーズは戦慄した。相手に対して無防備な尻を向けているのだ。

「うううううふあ……」

ナメクジ人間が呻く。それは喜びなのか悲しみなのかは全く解らない。

「な、何を……」

ベチャベチャとせわしなく口から伸びた触手を動かして、ナメクジ人間はマーズの背中に覆いかぶさってくる。

「い、いやああああああああッ!」

背中を通して伝わるナメクジの気色の悪い感触、そして浸透する粘液。そして尻から太ももの裏に張り付くナメクジの身体。小さなナメクジ達はその身体の空いている部分に取り付き自らの身体を擦り付けるように這いずり回る。小さい頃に聞いた地獄の話は、まさに今このような状況の事なのだろう。

「は、離れなさいッ! 離れてッ! やめてっ!!!」

逃げることも振りほどくことも、拒絶することさえも出来ない。無力なセーラー戦士はナメクジによって敗北した事実をこれ以上無いほどに突きつけられた。

「ひいっ!!! 何してるのよ! そこは——」

ゆっくりと、自分の股間を守るレオタードがナメクジの身体によってずらされて行く。そして頭となっていく無防備な、未だかつて誰も触れたことがない割れ目をさらけ出す。

「お願いッ! やめてっ! やめ——ひいああああああああ



あああああ……!!」

恥も外聞もなくマーズは叫んだ。涎をまき散らし、その絶望に
向かって叫んだ。

「いやああああああああああああああああッ!! いやいや
いやああああ!!」

ナメクジの、醜悪な生殖器が、ゆっくりりと、マーズの秘所の人
り口を粘液で濡らし、体内へと刺さっていく。

「あ、ああ……」

受け入れたくはなかった。自分の初めてが、よりにもよってナ
メクジに散らされたのだ。そしてそれはヴィーナスも同様だった。

「んんんんんんんんッ!!」

口を塞がれている為に、満足に叫び声すらあげることさえ許さ
れず、一際大きな呻き声とともにヴィーナスの処女も散らされ
てしまった。

（ひどい……こんなのって……）

もはや身体は指一本動かすことさえ出来ずに、ナメクジによる
陵辱を受けている。マーズも、ヴィーナスも、ただひたすら一個
の肉、ナメクジにとつての餌となつてその醜悪な捕食行動——い
や、生殖行動を受け入れるしか無かった。

（お願い、みんな……助けて……）

それは二人にとって共通の、唯一残された希望だった。もはや
自力で逃げ出すことは不可能であつたし、何よりもナメクジに犯
されているのだ。

「んんん、んぶう!!」

そんな考えを見透かされたかのように、ナメクジの生殖器はヴ
ィーナスの胎内で膨らみ、粘液を大量に分泌させ、侵食していく。

「ひっ、あっ……うあッ……あ」

マーズは背後から覆いかぶさるナメクジの愛撫と、うねり狂う
生殖器によって身体がその都度跳ね上がるような感覚を受ける。

そう、二人は粘液によって徐々にその身体を犯されていた。正

確には粘液に含まれる成分によって、まるで麻薬を摂取したかの
ような感覚に陥っていたのだ。視界が揺れ始め、抵抗感が一切消

えていく。抵抗することの意味さえ解らなくなり始め、自分が今
何をされているのかさえ解らなくなっていく。そして、ただされ
るがままにその身を委ねていることに、気が付いていなかった。

指一本動かすのもどかしく、ただその波に流されていく。

「う、ふあ……ああ……」

（だ、め……なに、も、考えられなく……なっていく……）

「んん……んん……」

（何、これ……身体力が……抜けて……）

先程まで大きく目を見開き、嫌悪感を露わにしてその苦痛を表
していた二人の表情は、今や夢遊病者のそれと同じようになって
いた。目は半開きとなり、呻き声も叫び声も弱まり、それに代わ
って弱々しい喘ぎ声を出し始めていた。無気力に、気だるげに。

マーズの、閉じることを忘れてしまった口からは涎が滝のよう
に流れ落ち、ヴィーナスに至っては痴呆のように涙と鼻水と、そ
して触手を挿し込まれた口の隙間から涎を垂れ流していた。括約

筋が緩み、排泄物がそのまま垂れ流され、それらはナメクジが群
がって綺麗にしていく。そしてその開いた肛門へもナメクジが潜
り込んでいった。

「あああ……あああ……」

「んあ……ん……」

そして、二人のセーラー戦士からは思考が消え、単なる肉と化
してナメクジにその身体を貪り尽くされていった。



長い夢を見ていた。だがそれは実際にはわずか一時間前の出来事に過ぎない事を、目覚めたばかりのセーラーマーズには解りようもなかった。何しろ、薄暗く、時計もない地下の世界なのだ。
「ん……」

「（こゝ、は……）」
自分が先程まで何をされていたのかも遠い昔のように感じる。それどころか、夢を見ていたのかもしれないとさえ思う。だが、現実是非情な事実をマーズに突きつけた。

「（身体が、動かせない……）」

ぼんやりとはつきりしない思考は寝起きのせいもあるのだろうが、それ以上にナメクジ妖魔の粘液を大量に摂取してしまったためだろう。

「（一体、どうなって……）」

身体を動かそうとしたが、何かに固定されているらしく自由に動かない。しかも自分は今起き上がっている。揺れているのは何かに吊るされているのだというとは何とか解った。そして次第にハッキリとしていく視界と思考。

「（え……）」

吊るされている事は確かだった。それは強力な限りなく固体に近い粘液であるということも解った。まるで糸のような粘液によってグルグルに巻かれて天井から吊るされている。周りを見れば、それが自分だけでは無いことも解った。

「（ヴィーナス……?）」

すぐ隣に、仲間の姿を見とめることが出来た。同じように吊る

され、死んでいるように眠っている。僅かに肩が上下していることが生きている証だった。

「（すぐに、逃げないと……）」

だが、先程からそうしているようにまるで身体が動かせないのだ。固定されているというだけではない、自分の思い通りに身体が動かない、そんな感覚だった。

「（ヴィーナス！ ヴィーナス起きて！）」

このままでは取り返しがつかなくなるという思いで、マーズは仲間の名前を呼ぶ。効果があつたようで、ヴィーナスは重い臉をゆっくりと開いた。

「ん……マーズ?」

未だ覚醒していないのは自分も経験したばかりだから良く解る。だが、ゆっくりと待っている場合ではなかった。

「（ヴィーナス！ 早く逃げないと……え?）」

言った瞬間に、ふと自分の足元が目に入る。どうして今まで気が付かなかったのか不思議なくらいだった。そこには自分の脚が確かに存在するが、よく知っているものではなかった。

「（い、いやあああああああ……!）」

まるで骨が溶けてしまったかのように、グネグネに曲がっている自分の脚。ヴィーナスも同じような状態だった。

「（キヤアアアアアアアアアアアアアアア!）」

ヴィーナスもまた叫んだ。目覚めてすぐに飛び込んできた異形の脚。そして、指も、腕までもが軟体生物のように人間にはあり得ない動きをしていた。

見れば周囲に吊るされている人々も同様だった。いや、さらに酷い者もいる。

「（うろうろうろう）」



呻き声を上げ、そう、人間とナメクジとの間の子のような姿になっ
ているではないか。

「そんな、嘘よ、こんなの絶対に……」

わなわなと肩を震わせ、青褪めた表情でそれを否定する。

「イヤアアアア!!! ナメクジなんかになりたくないッ!!!」

ここは人間をナメクジにするための場所だったのだ。

(そんな、まさか、さっきの粘液が……)

マーズにはそうとしか思えなかった。そして、それは正しかったのだ。

ヴィーナス共々ナメクジに蹂躪され、大量の粘液を陵辱
という行為の中で体内に夥しいほど流し込まれた。

恐らく周囲の人々も同じような経緯を辿ったのだろう。

「もう、手遅れなの……?」

独り言には絶望感が大量に含まれていた。

自分達はナメクジにされた人々を救うどころか、今まさにその

ナメクジにされようとしている。セーラー戦士が全滅したら、一

体誰がこの人達を、自分達を救うのだろうか。

だが、未だ他の戦士達の安否は判っていない。もしかすると、

何とかナメクジを撃退して私達を探しているかもしれない。

(そうよ、未だ絶望するには早いわ!)

何とか自分を奮いたせろしか無い。

「解ってるわ! 他のみんなが絶対に助けに来てくれる!」

泣きながら、ヴィーナスも同じことを考えていたのだろう。応
じる声は早かった。

「絶対に諦め——な、が、ああああああッ」

突如ヴィーナスが呻く。口から触手が伸びたのだ。いや、それ
は舌が触手へと変化していったものだった。

「ヒイイイ!!!」

自分の眼前に現れる自分の触手に衝撃を受けるヴィーナス。

「そんな……ぎ、ぎああああ!!!」

マーズもまた、舌が触手へと変化していった。

「ひやあああ! いひやああああ!!!」

言葉を紡ぐ事さえ出来なくなっていく、そして視界が徐々に暗
くなっていった。

「はひも見えひやい!!! 見えひやいほお!!!」

目は開いているのだが、視界は漆黒に包まれた。だが、それも

一瞬の出来事だった。見えなかった視界が、また薄っすらと見え
始める。それは、未だかつて見たことが無い視界だった。

(なんで……右と左が同時に見えるの?!)

独立した視界が同時に脳内で描画される。それは外部から見れ

ば明らかな出来事だった。額から生えた触手、その先端の目が新

たな視界を提供していたのだ。

「ギギアアアアアア!!!」

「お、おとおッ」

これ以上無いほどの喚き。呻き。それは人間としての最後の咆

哮だったのかもしれない。ヴィーナスとマーズは最早八割ほどが

ナメクジのそれへと変わっていた。自分達が戦っていたナメクジ

人間に近い姿へと、ゆっくりと変わっていく。

(みんな、お願い……絶対に、助けて……あ、れ……みんな?)

(私は、愛、野……美奈……ヴィーナス……わ、たし……は……

……?)

人間としての思考も出来なくなりつつあった。そう、変化して
いくことへの恐怖が薄らいでいき、自分の記憶の中に存在する
様々な人々の顔が消えていく。自分が何者であったのかさえ定か



では無くなっていく。

(だめ……消え、ないで……)

(妖魔になんて、ナメクジに、なんて……なりたく……ない……)

そして二人の思考は闇の中へと沈んでいった。

——クチャリ クチャリ

無数のナメクジ人間が生まれていた。いや、変化と言うのが正しいだろう。それらのナメクジ人間たちは、目に写ったナメクジ人間に近付くや、互いに互いの身体を絡めあい、粘液を混ぜあわせながら快楽を貪り、新たな妖魔となったことの喜びを確かめ合っていた。

その中に、それぞれオレンジと赤のポロポロとなった衣装を身にまとうナメクジ人間がいた。セーラーマーズと、セーラーヴィーナスの成れの果てであった。

「んんう……」

「んぶあ……」

互いに触手の舌を何重にも絡みつかせ、お互いの男性器をお互いの女性器へと挿入させ、まるで一つの生物のように絡み合いながら交尾を行っている。

「フシュウ……」

「ンアアアア」

おぞましい人外の溜息を吐きながら異形の営みを続ける。既に子供も産んでいるらしく、ナメクジの幼体は何十匹も足元に蠢き、身体にまとわりついている。だが、子供を愛おしむことも省みる

こともなく、ただひたすらに快楽を貪っていた。

(アア ズットコノママデ イタイ……)

(コンナニ キモチイイコト ヤメラレナイ……)

既に思考は妖魔のそれと化し、セーラー戦士としての使命も無く、辛うじて残された衣装と外見によって判別は出来るものの、それ以外は完全な妖魔であった。

そんなナメクジ妖魔達にとつて平穏な空間は、突如現れた侵入者によって破られてしまう。そう、かつてこのヴィーナスとマーズが人間だった頃に待ち望んでいた者達が現れたのだ。

「ここは?!」

「気をつけてジュピター! 無数の妖魔反応があるわ!」

別の入口から侵入していたセーラーマーズと、セーラージュピターは、一歩遅く辿り着いた。そう、時間にしてほんの三分。だがそれが致命的な遅れになるう等とは微塵も思っていない。なかった。

マーズもジュピターも、同じようにナメクジの群れに襲われたのだが、マーズの解析によって床に張り巡らされた粘液を回避し、大多数を超えるナメクジを駆逐しようやく辿り着いたのだ。

だが、二人の目に写ったのはこれまでとはまるで違うナメクジ人間の行動と群れ、そして、見知った衣装を身にまとうツガイのナメクジ人間だった。

「そんな……」

ジュピターにはハッキリと解った。ナメクジ人間であっても、外見だけは人間の面影をだいたい残している。そう、それがマーズとヴィーナスの変わり果てた姿であることも、容易に判別することが出来たのだ。



「酷い……ッ」

マーキュリーもそれに気付き、思わず口元を両手で覆う。見るに耐えない光景であった。妖魔を倒すべき存在のセーラー戦士である二人が妖魔——それもおぞましいナメクジ人間となって、背徳的な生殖行為を行っている。

そんな二人の衝撃など知った様子も無く、ナメクジ人間達はこの侵入者が人間であること、そして膨大なエナジーを秘めていること、何よりも平穏な生殖行為を中断させたことへの怒りから、一斉に二人へとその触手の目を動かした。

「フシヤアアアアアア！」

口の触手をせわしなく動かし、絡み合っていたお互いの身体をゆっくりと離して、ナメクジ人間達はマーキュリーとジュビターへと向かう。

「ジュビター！ ここは一先ず逃げましょう！」

「ダメだ！ 二人を放っておく事なんて出来ない！」

それが命取りであった。ナメクジ人間の数にして三〇は超える。それらが一斉に粘液を噴き出したのだ。二人の注意が一瞬逸れていた事と、仲間の変わり果てた姿を見た衝撃とで、啞唖の判断を遅らせることになってしまった。

「きゃああ！」

「うっ……」

直撃は避ける事が出来たが、それには何の意味もなかった。僅かに脚に付着した粘液は、マーキュリーとジュビターの動きを完全に封じた。そこへさらに襲いかかる粘液。

「やめるんだマーズ！ ヴィーナス！」

先頭グループにいらった仲間の名を叫ぶが、二匹のナメクジ人間はその言葉に何の反応も示さなかった。それどころか、動

けなくなつた粘液まみれの獲物に向かって無表情に、さらに速度を上げて迫り来る。

「い、いや……ッ」

マーキュリーの顔が、初めて恐怖に歪む。

「くそっ、動けない……ッ」

怪力を誇るジュビターを持ってしても、粘液から逃れる事は出来なかった。

「フシユウウウ……」

ヴィーナスの口元の触手が蠢き、粘液が滴り落ちる。

「来ないで！ いやあああああ！」

仲間の、そのおぞましい行為を見たマーキュリーは我を忘れて叫んだ。そう、自分もこれからこんな姿にされるのかと想像した瞬間に、戦士としての使命と矜持が一気に吹き飛んだのだ。

「マーキュリー！ しっかりするんだ！ 私達が負け——ひっ！」

ジュビターは仲間を叱咤するはずが、天井から粘液の糸によって落ちてくるナメクジの幼体の群れの雨に打たれて、情けない声を上げてしまう。

そして、数分後には、このセーラー戦士の二人も、無数のナメクジの津波によって、姿が見えなくなった。

B A D E N D



ダイヤモンド

「ネールネル！」

勝ち誇るダイヤモンド。このパズルから生まれた猫のようなダイヤモンドはセーラー戦士の想像を超えた力を持っていた。

「つ、よい……」

「負けちゃ駄目よマーズ」

2人のセーラー戦士、セーラーヴィーナスと、セーラーマーズは、その強力なダイヤモンド——ネコンネルの前で無様にも倒れ伏していた。

「身体が、動かない……」

自在に動く尻尾に翻弄され、何度も壁に叩きつけられた身体は、痛みと疲労で満足に動かす事ができなかった。

「お前たち、弱いネル」

余裕の勝利といったところか、猫のように両手首を曲げてポーズを取ってみせる。

明らかに挑発されているのだが、それに反撃する事さえまならなかった。

「こ、の……」

ギリギリと歯噛みをしながら、何とか起き上がろうとするマーズだったが、身体を動かす度に走る激痛によって、その動作は酷く遅かった。

「ふふふ、無様ネル〜。そうだ、良いことを思いついたネル」

そう言うとネコンネルは起き上がろうとするマーズのその長い漆黒の髪に自らの尻尾を絡めると、一気に力を入れて引き上げた。

「いっ、キャアアアア！！」

髪を引っ張りあげられ、毛根から何本もの髪の毛が抜けるが、それでも大部分はマーズの体重を支えてその身体を釣り上げた。

「痛いッ は、離しなさい！！」



マーズは髪の毛を捕まれ釣り上げられた状態で、ネコンネルの側まで引き寄せられる。

「マーズ！」

仲間を心配するヴィーナスだったが、そこに駆け寄る事さえかなわない。

「これから、お前のピュアなハートをもらうネル」

ニタリと笑うネコンネルの表情に、マーズは恐怖した。

「ひっ……」

そして、顔の間近まで近づけてくる尻尾の先端は、男性器の形状をしていた。

「これで、お前の大事なところを突きまくるネル」

ペロリとその尻尾を舐め上げ、湿らせる。淡々と告げられる死刑宣告。

「い、いやあ！！ や、や、やめなさい！！」

泣き喚きながらも、セーラー戦士としての矜持がそれを強く拒絶する。

「もう遅いネル」

幾本もの尻尾が触手のようにマーズの脚に絡みつき、固く閉じようとしていたその股を力任せにこじ開けた。

「お願いっ！ それだけはやめて！ いやああああ！！」

抗うことが不可能であると悟ったマーズは、早くも泣き崩れた。だが、そんな様子を面白がっているネコンネルにとって、それはこれから始まる行為の余興に過ぎない。

「絶頂した瞬間に、お前のピュアなハートは飛び出るネル。せいぜい頑張って耐えるネル。

ふふふ、フニャハハハハ！！」

高らかに笑い、ネコンネルはマーズの股の根本に向かって、その男性器の形状をした尻尾をいきなり差し込んだ。

「い、ぎああ！！！」

極太のそれは、マーズの誰も受け入れた事のない腔内に無理やり侵入する。許容量を超えたそれは、なめらかな毛のお陰で比較的スムーズに奥へ、奥へと潜り込んでいく。

「あ、ひあ……があ……ッ」

口をバクバクさせ、味わったことのない衝撃にマーズは身体を震わせた。



「あっ、ひっあ！ ひっ！ んあ！」

激しく突き上げられ、身体が激しく上下に動く。マーズはネコンネルの玩具と化していた。何も考えることが出来ず、何も抵抗する事が出来ず、ただネコンネルのピストン運動によって身体が揺さぶられる。

「あんっ！ んんんっ！！ んはっ！ はっ！ はっ！」

呼吸さえ満足にすることが許されない状況。だが、初めは苦しかった衝撃も、次第に別の感覚へと変わっていた。熱さと、そして股間を中心に広がる疼き。突き上げられるたびに熱が広がり、そして疼きが満たされる。快楽とは決して呼べないが、その激動はマーズの女性の本能を力尽くで揺さぶっていた。

「あ、ああああッ！！」

涙と鼻水でクシャクシャになった顔を無様に晒し、理解できない感覚に抗いきれずに押し流されていく。

「はひっ！ はひっ！ いひい！！」

マーズの胎内に体験したことのない、さらに強烈な熱が込み上げてくる。脊髄から脳へと電撃が走る。抑えこむ事が出来ない何か、マーズの中に生まれようとしていた。

「あ、ひい！！ な、にこれえええええ！！」

そしてピストン運動がさらにそのスピードを上げた瞬間、マーズは一気に空へと飛び上がるような感覚を味わった。引き伸ばされたゴムが一気に開放され、吹き飛んでいく。

「うああああああああああああああああああああああッ」

一際大きな絶叫と共に、マーズは強制的に絶頂させられた。そしてその叫びとともに、マーズの胸元が激しく輝き、周囲の色が一瞬反転する。

「出たネル！ ビュアなハートネル！！」

マーズのその心は絶頂と共に外へと排出されてしまった。そして、さらに恐るべき変化がマ

「あ、ぐ、あ……ガァァァァッ！！」

光の中のマーズのシルエットだけがヴィーナスには見えていた。マーズの身体に、急速に何そう、明らかに人間のシルエットではなかったのだ。



「そんな……マーズ!!」

ヴィーナスの眼前で犯され、絶頂し、ピュアなハートまで抜き取られたマーズは生まれ変わったのだ。

「ふううう……」

光が収まり、そして、傷つき倒れて満足に立つことさえ出来なかった筈のマーズが、軽やかに立ち上がっていたのだ。ヴィーナスの知っているマーズとは違う姿で。

「ネールネール!!」

そう、ネコンネルはただ犯していただけではなかった。自らの尻尾の男性器から分泌される邪悪なエネルギーによって、ピュアなハートを失った無防備な身体となったマーズを変貌させたのだ。それはマーズの身体をしているものの、それ以外の全てがネコンネルと同じ姿だった。

「そんな……人間が、ダイモンになるなんて……」

驚愕するヴィーナスの目の前で、マーズはべろべろと自分の拳を舐める。その仕草はまさに猫そのもの——ネコンネルと瓜二つであった。

「生まれ変わった気分はどうネル？」

「あはああ……最高ネル……」

口調も、そして心までもダイモンへと変貌していた。

「私は疲れたネル。お前に生まれ変わってから最初の仕事を与えるネル」

そう言うとネコンネルは、怯えるヴィーナスを見て言い放った。

「お前の手で、そいつのピュアなハートを奪うネル。ついでに仲間も増やすネル」

「ひっ……」

マーズは、言われるまでも無いといった表情でヴィーナスを見つめた。

「解りましたネル! こいつからピュアなハートを奪うネル!」

「い、いやあ!!」

逃げ出すことも出来ないヴィーナスは、いとも簡単にネコンネルと化したマーズに組み伏せ

「お願い、やめてマーズ! 正気に戻ってッ!!」



「ネールネル！」

マーズは、変貌したばかりだと言うのに、器用にその尻尾を動かすとヴィーナスのその細い首へと巻きつけた。

「う、ぐっ……」

ギリギリと強い力で締め付けられ、満足に呼吸をすることが出来ない。

「か、はッ……く、るしい……ッ」

なんとか尻尾を首から引き剥がそうとするも、腕を上げるだけで精一杯な状態のヴィーナスには抗う事など不可能に近い。このままでは窒息するだろう。

「く、あ……」

声がか細くなっていく間際、ヴィーナスの身体は突然地面に降ろされた。丁度股間がマーズの構える男性器の尻尾を目掛けて……。

「ぎっ、ああああッ」

マーズを背中にした状態で、前触れも無く挿入される尻尾。

「うあああああ！！ ああああああッ！！」

叫ぶことしか出来なかった。両腕を捕まれ、無理やりに引き寄せられての前後運動。

「あっ、がっ、ひっ、ひっ！」

突かれる度に呼吸が断続的に途切れ、その度に身体が大きく揺れる。

「気持ち良いネル！ 最高ネル！！」

マーズもまた、尻尾の前部がヴィーナスの膣内で擦れる度に歓喜の叫びをあげていた。

力任せに、まるで物を扱うように行われるそれは快楽も何ももたらすことは無い。

ただただヴィーナスは衝撃を受け続け、訳も解らずに痛みと疼きに泣き叫ぶだけ。

「あひっ！ あふあっ！！ ふあ！！」

無様な喘ぎ声を繰り返しながら、ヴィーナスは犯される。一方的なレイプは、あっという間にヴィーナスの精神を破壊していった。

「ぐっ……はひひひ！！ いひひひ！！ 熱い！ 熱いよおお！！」

知らぬ間にこみ上げる熱も、じっくりと感じる間もなく急速に高められていく。



「あつ、あああああああああッ!!」

一際大きくマーズの尻尾が痙攣した瞬間に、ヴィーナスは頂点へと登りつめ、そして落ちていった。

「か……はあ……」

ヴィーナスの身体は光輝き、そして、ピュアなハートが飛び出す。その瞬間にヴィーナスもまた人間ではなくなった。

「ネールネール……一度に2人も仲間が増えたネル」

それを満足そうに眺めるネコンネル。ヴィーナスのシルエットは、マーズと同様にネコンネルのそれへと変わっていた。

「ネールネール!!」

満身創痍だったヴィーナスは、生まれ変わった身体をくねらせて高らかに叫んだ。

「ふああああ、最高ネルう」

未だヴィーナスを犯した快楽の余韻を味わっているマーズも、仲間の墮落した姿を見て喜んだ。

「さあ、こっちへ来るネル」

ネコンネルが大きく両手を広げて、2人を呼ぶ。それに応じてダイモーン——ネコンネルと化したセーラー戦士は四つん這いとなってネコンネルへと猫のように擦り寄る。

「ふにやああああ……」

「にやああああ」

目を細めて、自らの身体をネコンネルへと擦り付ける。もはやセーラー戦士の面影などボロボロとなった衣装でしか判別することが出来ない。

「ふふふ、いい娘達ネル。お前たちにはこれから役に立ってもらおうネル」

あどけない姿でネコンネルに忠誠を誓う2人は、その主人の言葉を聞いてさらに激しく身体を擦り付けるのだった。

END



タタリ

生暖かく、湿度が高い下水道。不快で不潔なこの空間を走る影があった。

「マーズ……どこにいるの……」

金色の長い髪を靡かせ、仲間の名を呟くのはセーラーヴィーナス。

こんな場所に似つかわしくない彼女がいるのには訳があった。

数百人もの人間が、同時に姿を消したのだ。謎の失踪事件としてニュースを賑わせて世間を賑わせている。

セーラー戦士達も調査に乗り出したのだが、セーラー戦士の1人である火野レイには事件の原因がすぐに判明できたのだった。

曰く――

「街の片隅でひっそりと祀られていた神の祟り」

その祀られていた小さな社は何者かの悪戯によって落書きされた挙句に放火されたのだという。

「レイちゃんには悪いんだけど、ちょっとピンと来ないのよね……」

セーラーヴィーナスはその話が飲み込めなかったが、恐らくはその犯人が祟を受けて周囲に害を為しているのだという。

「とにかく、その犯人を見つけないと……」

セーラー戦士は散り散りになってその根源を探し始めていた。恐らくは妖魔と似たような気配を放っている可能性が高いらしい。

「――!？」

突然、前方を流れる下水の川からゴボゴボと何かが吹き上がってくる。

「な、なに？」

不思議そうにその泡を見つめたヴィーナスに、突如として白い液体が勢い良く飛んだ。

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」



セーラーヴィーナスが消息を絶って1日が経過していた。

仲間達は、セーラーヴィーナスの調査担当だった地区を重点的に調査し始めた。

「何だか、嫌な雰囲気だわ……」

ヴィーナスがまさに調査していた下水道を歩くセーラーマーズは、立ち込める異様な気配に眉をひそめた。

「こっち？」

自分の直感を信じて複雑に張り巡らされた下水道の中を辿っていく。驚異的な靈感に裏付けられた直感は、現場に近ければ近いほどよく感じる事ができる。

「あれ、は……」

そして、ほとんど迷う事無く異様な気配の元へと辿り着いたマーズは、その光景を見て愕然とした。

「ヴィーナス！」

そこには、数人の男性に囲まれる行方不明だった仲間の姿があった。だが、それはマーズのよく知るものではなかった。

(ひ、酷い……)

男性の前にしゃがみ込み、その可憐な口で男性のペニスを咥え込むセーラー戦士。目は虚ろでただ機械的に奉仕を行う美の女神の姿だった。

「このッ ヴィーナスから離れなさい！」

いうが早いか、マーズの手には護符が握られる。

「悪霊退散！！」

両手を振るい、護符が矢のように飛んで行き、ヴィーナスを囲む男たちの額に張り付いた。

「ぐ、ウオオオオオオオオオ！」

一斉に男たちが絶叫を上げ、そして砂のように崩れていく。可愛そうだが、既に人間では無く生ける屍のような姿となっていたのだろう。

「ヴィーナス！ ヴィーナスしっかりして！」

マーズは砂となった男たちには一瞥もくれず、仲間の元へと駆け寄った。



「しっかりしてヴィーナス！」

男たちによって性の奉仕をさせられていたヴィーナスの両肩を掴み、激しく揺すった。だが、ヴィーナスの反応は殆ど無かった。まるで糸の切れた人形のようにガクガクと揺すられた通りに身体が動き、口からは黄色みがかかった精液がどろりと溢れる。
(ヴィーナスがこんな奴らに負けるなんて思えない……それに、未だ気配は消えてない)
マーズはヴィーナスを助け出しながらも臨戦態勢を解いてはいなかった。
果たして、それは正しいことがすぐに照明される。
(来たわね……)

気配が近付いて来ることがハッキリと解る。それも下水の川の中から。これは靈感の無い他のセーラー戦士には気付く事が難しい類のものだった。

「さあ、出てきなさい！」

川へ向かって叫ぶマーズ。手には護符が握られていた。
そして、それは現れた。

(まさか、犯人……)

マーズが言っていた社を放火した犯人の成れの果てだろう。祟りを受けたことがハッキリと感じられる。巫女ならではの能力だった。

「祟りを受けて眷属にされたのね……」

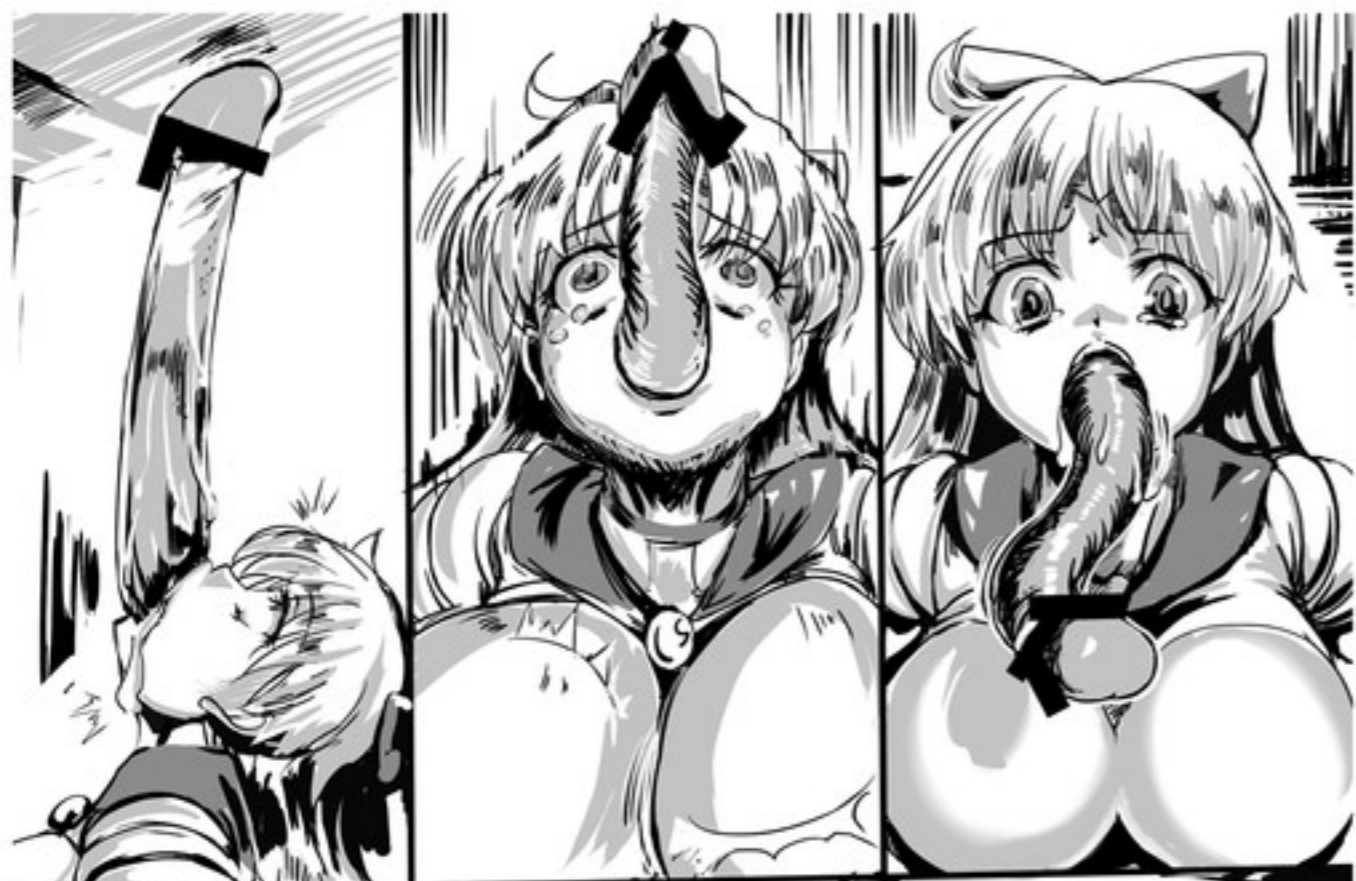
それは異様な姿だった。一言で言うならば巨大な男性器に人間の手足がついたような姿。胴体には人間だった頃を思わせる服。それは学生服のようだった。

「悪戯にしてはとっても重い代償になっちゃったわね……」

それは3体。まさか自分達もこのような姿になるとは思っても見なかつただろう。人間の心も思考も持ちあわせておらず、そそり立つ全身をビクビクと痙攣させてマーズに向かう。

「私には通用しないわよ！ これでも神に仕える身なんだから」

マーズは護符を巨大な男性器と化した彼女たちに向かって投げつける。
護符が大量に張り付いたそれは、身動きが取れない形となり、見えない縄に拘束された形でその場に立ち尽くした。



「さて、と……いくらなんでも、私程度のお祓いじゃどうにもならないわ……」

ことは霊力に関わる問題であった。セーラー戦士といえども浄化する事は難しい。祟りを受けたものを元に戻すことができるのかはマーズにとっても未知であった。

「ぐ、え……」

マーズがそんなことを考えている最中、ヴィーナスは人形のようにじっとしていたはずが、突如として異音を口から漏らすと、正気を取り戻す。

「ヴィーナス?!」

だがそれは正常な覚醒ではなかった。口から大量の白く濁った液体を吐き出し、そして喉の奥から何かが顔を覗かせる。

「お、おごおおおああ!!」

喉を抑えて悶絶し始め、必死にそれを押し留めようと藻掻くが、それは明らかに別の生き物のように本人の意思を無視して外へ、外へと出ようとしていた。

(なにこれ、何が起きているのよ……)

尋常ではない仲間の苦しみを、マーズは冷静さを失っていた。それほどまでに、苦しむヴィーナスの様子は常軌を逸していた。

「う、ごげえっ!! ごお! お、おおお!!」

くぐもった悲鳴は続き、手は痙攣を始め、両の瞳は真上をこれ以上ないほどに向く。

「ヴィーナス! ヴィーナス!!」

どうすることも出来ないマーズは、目の前でヴィーナスの変貌を全て見る事になる。口から生えたおぞましい物体。勢い良くヴィーナスの口から生えたのは、男性器だった。

「ひっ」

思わず後ずさるマーズは、華麗な動きとは程遠い姿勢で尻もちをつく。腰に力が入らない。震える両手、ガタつく両足。目を離す事が出来ない仲間の変貌。

「ご、え……」

男性器を生やしたヴィーナスは、意識があるのかどうか解らない様子だったが、突然飛び跳ねると目の前で腰を抜かずマーズに襲いかかったのだ。



あれから半日が経過していた。初めは犯されていたマーズだったが、今や自ら腰を振り、食欲に快楽を貪るまでに墮落していた。

マーズは一心不乱に快楽を貪っていた。その快楽を共有する相手——ヴィーナスは、今や巨大な男性器が頭部という皮をめくり上げ、マーズが動きを封じた祟りの犠牲者のような姿となっていた。否、それ以上に男性器が肥大化していた。

「あはあ……」

全身を使って巨大な男性器をしごきあげるマーズ。既に両目は正気を失い、正常な思考を失って久しい。胸は巨大に膨れ上がり、自分の身体程もある巨大な男性器に擦りつけ、汗と、唾液と、愛液を混ぜあわせながら上下に動く。

「いひいひ！！」

そして擦れる自らの女性器が疼き、その痒みを沈めようとより一層激しく動き続ける。

「もっとお！ もっとしてよおお！！」

巨大な男性器では、自らの女性器に収まる事が不可能だった。身近に手頃な男性器が存在せず、こうすることでしか快楽を満足させることが出来ない。

「もう、もう駄目えええ！！ わらひもお！ おがじだいいい」

回らぬ呂律で絶叫する墮ちた戦士。そう叫んだ瞬間、彼女もまた人間という存在に終止符を打つことになった。

「ぐ、え……」

喉の奥から来る違和感。マーズもまた、祟りという名の精液を体中に浴び、受け入れてしまったのだ。これからどうなっていくかは、巨大な男性器となってしまったヴィーナスを見れば一目瞭然だろう。

「ご、が、お、おおおお！！」

マーズは喉元を押さえ、絶叫した。そして一瞬だけ取り戻した正気の中で、異形へと変わっていく自分を見ていることしか出来なかった。



今作も何とか出すことが出来ました。
ナメクジというのはなかなか冒険でした。
やり過ぎ、でしょうかね……。

新セーラームーンも始まって、
だいぶ盛ジャンルもり上がってきている
気がします。嬉しい限りです(*´▽´)

また懲りずにセラムンジャンルは続けて
行きたいと思います！
今回は言葉少なめに……では、冬コミで！

在りし日の2人……



奥付

- 作品名：火星と金星の成れの果て
- 発行日：2014年8月17日
- 発行者：墮落事故調査委員会
- 代表者：シューミット
- 印刷：大陽出版株式会社
- 連絡先：sch-mit@goo.jp
- web：<http://schmitxxfallen.blog61.fc2.com/>

<注意>

- この物語はフィクションです。
実在の人物、団体、事件とは一切関係ありません。
実際にこのような行為に及んだ場合、法律で罰せられるおそれがあります。
- 本作品は成人向けです。18歳未満の方の購入、閲覧はお断りさせていただきます。
- 本作品をweb上などへ“無断で掲載する行為”はおやめ下さい。
- ご意見、ご感想などありましたらよろしくご願ひ致します。





Presented by

墮落事故調査委員会

18歳未満の方の購入・閲覧を禁じます。